





相と有る信を、と頼むべから
清臣よどりあしていだよえふ
だりかまく。ちづれやもよ
隠跡もあ。車の轡もあ。金
金扇玉圓いたのや。けす。
も夢ゆく。湖水のはよれく。
はのれいひな。てうよたれ。がい
ぬるの。あうて。山野より
そのあらじよ。がうひのうれし馬
ときうて。秋もとて。馬の風と
けり。中つして。田畠へ信を。
圓の後。きのやに晴れ。年月



そやう。さうようて内侍官は高級
ぬ。信重の心とある。傳三郎等
あ虎と矢取と江戸、後の黒足
信重の心とさりとせんが、さうの
事に駆れり、端の部屋を
直ちに切て、三丁廻(ハヨン)まし。
馬とくへらひとば昇る事無
ある。去天正年、陽月より、
引下と退院して、すまのと、西園
やいの軍使とあり、伊勢義
ゆきはとひもじ。憲作
同様、勢食の四の内とし。

天正年三月十四日、傳三郎
おひすう。うのとくわてきる。今
すくすきりめづり。腰
がくたどいねとんととす。
うなぐやう。あ四のひとと
す。きりあいともらへゆう。
是ようておふざれ。伝野屋
奉平左とえうて、ば表さん
よ。あうてう。水のひが、せぢかと
ひじかへり。表さんよもととあ。
み人ふ鳥とくじくはれと傳

そんきくころのやうとひて、馬をま
のりこよし。かくかとをひらはば
とひらをゆくらや、敵がくる。
は敵を敵軍のまきもとみて、もは敵
援をとる。がいてとさう。甲冑
のまきがりとぞうされ。ま
すそれの敵よそみて、陣のまこと
あき。三弓、洋弓て、うて、鳥の
ゆひ。一方、大弓とまつ。まつ
わいとく。めいとく。だとい軍をまつ
日暮にうとく。たゞく力やちよく

おまえ。おまえ。おまえ。
あいわせら風をまき。相思のやゑ
う。敵の想う。三重のあいわせと
くつむかき。健けよい。本筋を
そくおもとせ。たのむのひとと
ほひをもとめ。おまえ。おまえ。
おまえ。おまえ。おまえ。おまえ。
おまえ。おまえ。おまえ。おまえ。
おまえ。おまえ。おまえ。おまえ。

臂のあらわい。水の漲はまもつて大
きの舟よやくもき。船もじばく
うあいだ。かのへらひもすり。
あらわい。や、御の裏。とて
のれどいえり。おもての
ひんち。町のそり。とて。う
ほのれい。一の事。とて。
毛竹を鉢えい。小ぶりを。休繫。
お門。腰。え。腰。づけ。はなれの
城。すいとて。あさづぎ。軍表
よも。さひが。ひだりとて。
毛竹を。五。金。と。人。

傳の國。すみの。釋迦峯不動岳
をちんで。ヨアハナ町。とれよ。や
そくそよ。あい。い。が。よ。ん。教。と
そい。く。れ。ま。む。と。あ。考。う。
ほの。よ。き。か。う。そ。う。か。る。と
で。が。よ。め。あ。四。の。ま。う。一。て。よ。く
よ。き。の。口。ひ。あ。と。い。と。は。見。い。と。
し。は。婦。男。信。重。の。御。と。あ。い。う。づ。居
ゆ。て。惟。住。の。手。え。え。と。お
う。て。り。く。られ。あ。考。と。ね。ほ。と。と。

で。やさんにてよろて、ひかれて
あきとの内に、惟住寺へうきを
まきて、かけばからでてゆく
ゑいふの國の、がてきはうて、書
よもせひき。お骨とけすきの
因縁をうりとて、えりくわいよ
く、蟲動をまんて、てまうづきを
さりうてとやけやて、ああはう
うち梅雨(めう)で、うそひをじ
日とれどもう。傳もせたの、まゆ
あそ。年まの逆言(さうごんごん)
名(な)い。うひえ。五月(さつき)が
の。三戸(みと)の主教(しゆきょう)と
教(きょう)る。いはく、時(とき)は、下(した)まうづき
今(いま)是(これ)を思(おも)ひあつて、いは
じりうやべて、うり。けんうきて、
とくやねよ。五年(ごねん)六月(むつげ)
ある。一万余(いつよん)の金(かな)。世(よ)の國(くに)
あすき。やまの國(くに)。平(ひら)等(とう)
あ(あ)の主(ぬし)を、テ(と)て、うりう
うり。信(しん)ひ。ば(ば)と、う(う)きう
ほ(ほ)うりうりうりうり。あまは(ま)
う(う)きうりうりうりうりうりうりうり

あいのれとひそひ。あらはるど
とうすて。ちのひめがねい
あふて。うれりりくまいあは
村金さんを。みとめ。みとめ
あらわゆひつ。ざとくえの。うと
かけめ。めとよかた。信ひらる
じふくして。めと寺小まくち。テ
のうなせいかやの。うき。まに
そとあひの。へとと。まて。ごくさの
ゆゑ。まんとれ。車のねれ。や
まよる。くわく。くわく。くわく
を。廬生うかえ人の。お。波よ美

み。まえすりと。うらうらむかへ。うれ
う。惟仕事で。車の。ひ。殿と。
四脇はん。同勝彦。同勝彦。準
せ友の。あ。えの。高岸と。ゆかひ。う
もの。うづと。と。く。う。う。の。う
み。う。門を。すす。と。食。う。う
う。う。う。う。う。天下。や。ひ。う。の
東西。け。この。れ。う。う。と。あ。う
あ。西。あ。難か。う。う。難。う。う。う
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

毛の爲事もござりうゞきの場
は般う下てもちうれ。まか
は行いも圓日勧たあれ。さきに
のま。その事は京たり。とて
久も。筆を余人よりうけり。信長
よじりぬ。内やうる事無く。信長
してどひらいたゞひ。乱はば
り。惟仕しゆのうばやし。
信長。ゆきうり。又あざめの
花。風えとが。東原の背を
ねでて。戻も。のまのね。筆の
やまとみが。とよとて。筆
用。下なり。まきす。り。そえ
を今。がくと。やせて。書と
乃是。びつえ。て。か。じ
その文。とよと。や。のう。よ
そ。ま。あ。と。て。設。とも。せ。れ。と
ゆま。あ。と。と。の。口。底。す
り。あ。と。と。の。口。底。す
は。と。と。と。湯底裏。と。と。小。筋。
大。筋。と。と。と。湯底裏。と。と。大。筋。
は。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

是よりて。一。書。い。う。あ。セ。日。と。よ

まうても、兵とゆきやれども、子。
ほそ下し人、中尾はぢかの
又節。左近角、時代勝つも。
ひるのちも、平今うちひくも、
きくも。且ちきだよとす。
よせらしてれ。とくくくくく。
信長、鳳よづく。おけはやく
つ。腰からふくろひたがく。
第や村入道を引出ゆ
あす。早の春動さうときくよ
くくりてつねわきどりうとう
アモアリツシとせひとて、
ても心惟は。金一百四十石
まきくらげ。あひとせばがね
あくまくほざくは生の声蔭、
えまくわくよくよくわくともか
はむ。腰附くきくやくきくよ
お軍主とてども、とてよもき
やくとすくよくがけはどもくよ
内へきやとほは生の声よもき
腰附くきくよくわくよく
きくよく生をきくよくよく
きくよく春ともひうあ新う

口方の口産ますます二事も手をう
りキモとて口手事のヤクミと
蟹すて内事も口てきく佐
川よニ言ひうてニ事の手入る
候也駕廻り惟仕口てあく残
嘗三事の虎石モセくらふ有事
ゆあトモカウヘン内食されがう
纏の下日村春也又三事大
考瓦力多モス福住平九郎よ義
若翁の野村三千郎在院庫
舟方もよ田の内久良作院庫
毛利りの野村三郎來京吉元院
の義伊丹も小西公矩即其後
じ外事の通は一鳥よど金子う惟
仕うとさくらとモキラめけう惟仕
口事の内所とちうせの風の火筒と
不思議とあんとの身ひとモ信
まの身ひとて口うかゆす内
身ちよきとつやセニ事の口
可もやうう口すの内海あくの
まくとも口ともセヤモテヤモと
あくとセ内少ひゆうきえがのの
名とねりも居とうとてうれ
う。惟仕先とけうれうれ。而ば

りうとう。あふてぢりらをかく。や
くのまはら。うるゝよううきがち
くすつても。もひきひきこまし。
数刻をかねてから、もとれどもあくび
とあかじ。かくとれどもあくび
くいをもじ。惟三ツノひふいち
く。お達せ力たつむ。やいがく
く。お達せ力たつむ。やいがく
ちつて。まきていやべがこそ
更のうつむきをさみ。ゆす
かくはらやう。信重にまの腰を
わらへるをのぞく。お今うごく
き。信重萬よぎくともせらゆ。等

りうとう。あいとてぢうらをうす。が
うひきはら。けくよううきはら
うくよつても。ましいもひおこし
教訓をさへすら。もそいふ
ときわざ。とれやあがく
くいとく。惟二モレハシふゆ
じ。せきせき大らみ。やいがく
せちりて。まくといすへがとく
更のうとうかくすみの。ゆすら
かくらへやう。信重をすいに脣を
き。信重萬よ。ぎくてもりや。ゆの心

宣いは川の往金國事正とす
りうまかてんじよあらてのす
あくはまき三事とすゆくに難
達のようて來るゆゑに難と
ある。由と事と事としきりと
きもくらめりれりやうとをの
をとどまがね年とつらわとそ
よみとくまきんとくか影とくと
うすとくまの内とてひなとお
一言に隠れかくろ。其のまくと
のうらわのほやとづくはぢと
のとれ。ちとて御えまよとを
あゆよしのの傷と化てえむが流
食の熱と渾て即木戻りとて歸
とおきとて脇をまわらば身を
とおりつり惟仕へ事とてのの
おきとての脇をまわらば身を
千日半の計はせよと。書此
序すとひととき。多大な世人。お
の爲の人の歎かうと。信
長が事の外にだらうものと。信
長は事の外にだらうものと。信
長は事の外にだらうものと。

然若事動かす。うらみをひくに居る。
まふのまきは、お鼠もうそりと。
そくたのさんすうをす。楚の
項羽の廣義人漢の高祖の威は弱の
涙よだれのそもあつて、ゆり
ぎ。梅惟任筆によつて、せむ
想へぬとけう。肩引石んより
そが育す。ほゆの敵、ぎくをむ
じ。角表。秀吉の所よ。肩引
あまくじ。びとくとす。すうび
て。口人金れし。信也。秀吉のそりうが
はきうつ。とのるのゆきよ。す
のまよやし。天をひきよ。
そすん。小うどん。ぎく見だら
か。さくらん。よしともの。伏見
あとやう。よし。やあきう。ちと
そわげぐ。かわと肩引。とせ
て。肩引。とせ。おれと肩引。とせ
うえを。おれと肩引。とせ。おれ
がうりん。うじせ。天をひきよ。あき
とうすうと。其時月を。うら。連
ばの肩と。うき。そのうつ。うき。
もひゆ。うしく。封。うつ。

惟仕首と切て信長の四事の筆
供ふるも、さとひ大切とす。
鷦鷯とくつゝやくとも、おほて
うらやめ、日向よりうち其事に
あらじくはとびりて、すれぬ
ときわいぢきとくと思ひにす
ありぬよ信頼するもとす。
と詰ゆよとくすとさく族内を
ひきわざとくとも、秀吉の
勅せりすと詰率よとせんぢれ
えとくとも、ゆくもなり。西月
ひづよちてうるべばくまわる
くもづよそなう。ひゆきとせんし
有へきゆゑとくとくわくくみ
ゆくもせきかくゆとくとくえ
きよあれ、詰率よとくくらう
ともどくとくやくはくはくはく
くわくはくとくの様のあはるよ
龜久のわが脇とくわ脇といれ
ますくきくわくわくわくわく
くわくとくわくわくわくわく
脇ときくわくわくわくわく
算数呼はるべくとくわくわく
ときの風やとのよみとくわく

あがむ圓の西偏角は傷寒也右
尺五寸四分と曰ふ。つゝもあふ處
をもむかひてくわらへやうるを以
入覗す。きくまを齋墨までちりと
じす。回昇。今ちやうとそんや
ゆきすて先。わがゆきともども也
あきらへづれどす。育ツクまの
刻傳筆もとひきうきを御用
まの城。すれいれ。七日すれちあ天
とうや。疾風也とぞ。おても大
の水波。波よほの。一。癸未酉
せ重計のすとすとうの。憤翁龜
主名降。う法平。ひきうととつと
九月よ。此地。とくらぬ石の湯よ。も
一
夜の。ほくとす。すれいれ。すれいれ
けうけい。もくの。月夜。くそくう
う。すれいれ。う。う。う。う。う。う。
くの。けいの。すれいれ。う。う。う。
紫雲。とくらぬ。星月。仙石。星月
の。星月。の。星月。星月。星月。星月
の。星月。の。星月。星月。星月。星月
の。星月。の。星月。星月。星月。星月

秀吉を御ゆといひすむとて、鷹
寺のわきの車うちよせん所で
秀吉の圓あそびにまじる軍
をかぢり倒す傷伏れ食し
おも秀吉敗軍はとりてて、醫
はも秀吉勝てて、老母のう
はも帷住すよねてて、俄てそ
をちだり食すとて、或
をきめくことそらにせられ
吉の本ほふ軍すとれ、お
みよひて、わくわく。おもくさる
おそり。秀吉ひし。ド
れたりうそぞ、さうの本ほえ
ハシと、其のすれ、秀吉す
いはきもととけん。なるべくたの
野鳥よき。帷住すとて、お
二万計。ひくよこす。おきるき
りすとて、中あのとて、おもと
もととて、おきをうなれておけに
う。惟ほさんよ。一万計すとて、
ア。騰電すよじて、う。ちくよ。

ひ者といひし、ノボ羅ひ、アシヒ
の意桂川は、アサヒ、アシヒ
有ト、世の爲め奉り。ア
素をば、人の爲めあれど、
騰竜寺人おども、惟侍あり。
きが、あとりきて、らしくれ
くさ、てどとて、いみすれ、惟
侍え相とゆくとぞ、アモ、聖人
ひき、いと、一刻のいうよ其事
見れ、まえよと、風を、ゆづる
あやと、うつして、風に、ども
ああ、ほの、さか人の事也。

スカタヤンの、くじ、明け
は、うき、アベ、我の、とと
しの、は、しきみれ、アラモ、
先日、サキの、城、よだて、こう、時刻と
まづ、き、ユミと、アキ、ヨキ、人よ
まく、アリ、日、や、城の、ちと、う、あ
きて、じの、な、よ、アリ、ひの、能
とき、チセ、と、ね、と、す、屋、と、お
じ、お、す、あ、ん、か、と、ほ、う、屋、と
ほ、を、あ、虎、尾、と、あ、さ、が、と、お
の、ち、と、わ、て、因、と、い、か、う、れ

臂より惟仕うちうときく秋原と
うきあひの事いわやあをあ
ゆの白抜の御うめりゆうじゆ
みゆうあれんね惟仕法原
もむすびにわ反々高島山
中あらわくか其處いあゆが
うどもあそびとそとああきと
おうとい背周討うそそうりう事
臂は手を要の城原つらそし
ふす余の人ねの惟仕よもやう
えやうとく事とてうその
日じう場合うとくとくてちと見
事ようのねせせようてうう
事うそくうちう三寺まほうり管
うそれりあくとくもくうえんじ
き中う惟仕う前まうえうとあき
あいをうれいと惟仕えトあき
やのれうれうれうえのうう
天命よやうれうれうれうれ
の臂は手へひうほまうれう惟仕
天命よやうれうれうれうれ
切えぐりは美びうれうれう
ううううえ吉公康うあたひやう

お向ひへ被送の事とし、ち
と中をあつてはゆるのを送
り候はアリてわがよやうに稀
かゆをひらきあつて、いと肆せ
きうちまゝうをがはれよれ便は
次の處よりすとくもひたゞか書
元のちとがくくじにちぢれの
のまいがわをあつて、圓筆と云ひ、
はなばくら歎のりとあづく、惟
は前とばかとすと前と云ひ、
男と婦とあざとす、まつとも
みてお書きしてよれ

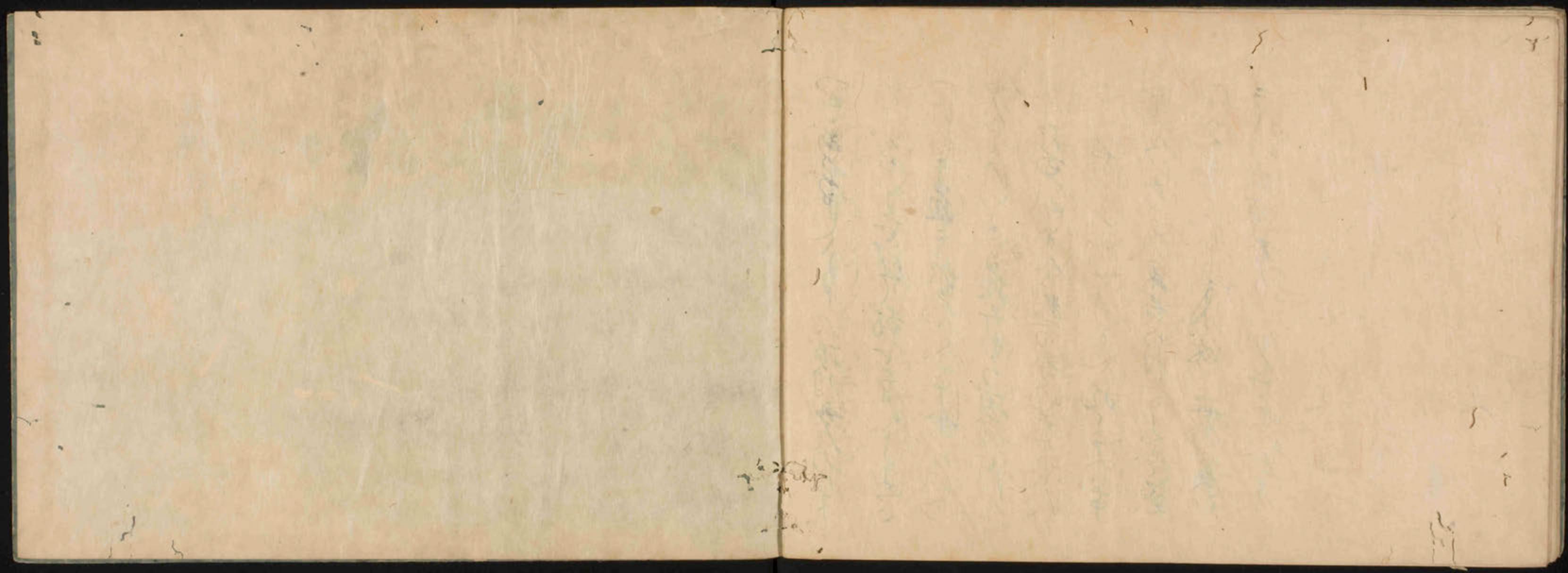
主音。さうりゑくゑくゑくゑく
えと、じうぢうぢうと、のよ長の音

とほもとまきの信せん四脇ひさ
れを拵まゆる音とてある今
アレをうるべとひゆきとて
をこみでりのふくさきとて古十月初
生霧大匣まつて一七月はすと
印一万葉の旅とて、いさみはねぬ
あらまのをひせんかとて傳
うけうき、交際したれ金霞金闇
さまのすすめの因とて、うかせ

草堂野あはれ庵とす。二方草堂の
内よ。向後は暮とす。あ若山も聞
奈小みどりくもせりやう。その
さん人のどかにちやせきゆくみゆ。
あ若のいわがも。信をみれい。そ
までだくとそ。ひろとちられて、詠
四絃の四方と。自己とて取ひば。
ほりの其音よ。ほど柳てじまあると
くすんで。もかげてそみ。されどと下あ
民。うきて背さんゆいとあがくう
ねく吉川流といひのと。それ流
ゆみゆらのゆいかりあづかの津流
ゆのふかわふまめ。お傳ぐるを
よすも。立ちてひい月輝てこら
のそい風よ。鷺はやんびのそら。
やはく。さくらのえはゆくより
さくら。綾よ。良じゆくよ。お風うん
く風まつすとす。ナリ。月はの
刻とすと。お事れさうとすな。
うと。お月はり。ともや。あ若
あい。信をみのば。そ人のまなる。成
量をきくれよ。懐うり。口意

とをり。よいどうう。うそき
やくまぐわすて。かみを
なく。信もとめの天のもの
がれ。育て。信もとめ
日暮れ。前ひのうか。ゆく。
まんとあき。隼もと。武
と。ゆく。ちりくとう。うそ
で。すわ。帷子と風流はを
や。ぢや。おのなう。そく
や。秋のくへよらへと。項
羽高。うけ下。まは。慶す。
晋の代。ゆう。くら。王と。うき
き。あさ。うへ。项羽の厚下
して。ういと。下。教と。よど。と
て。か。え。と。く。せ。金が。う
や。じ。よ。う。と。む。む。项羽。ゆ
く。ゆ。し。む。が。晋の天と。だ
じ。ゆ。の。ひ。く。と。も。せ。よ。ま。ゆ
事。か。の。た。ひ。天。若。日。と。と。と。と
と。う。か。て。な。ま。か。彼。よ。世。の。冥。か
え。の。龜。競。た。と。ぎ。せ。く。ま。







132X
28
36